

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 黒田 翔大

論 文 題 目

日本文学における電話の文化史的研究
——声のメディアとコミュニケーション——

論文審査担当者

主査	名古屋大学	准教授	日比	嘉高
委員	名古屋大学	教授	飯田	祐子
委員	名古屋大学	教授	藤木	秀朗
委員	名古屋大学	准教授	安川	晴基
委員	椙山女学園大学	准教授	広瀬	正浩

論文審査の結果の要旨

[本論文の概要]

本論文は、小説に描かれた電話とそれを用いる人々とを分析することにより、明治から現代に至る人々のコミュニケーションの変遷のさまを考察したものである。

第一部は、未来性をキーワードに論考をまとめた。第一章では、遅塚麗水「電話機」を取り上げ、電話事業開始以前における人々の電話に対する認識を考察した。電話事業導入に際して人々は受動的だったわけではなく、その可能性や危険性について様々な問題を認識していることが小説表現の検討を通して明らかになった。

第二章では、星新一「声の網」を考察することで、高度経済成長期における電話に対してどのような未来性が見出されているのかを分析した。「声の網」はインターネット社会を予見していたと評価できるが、作品の同時代的な意義についても強調した。

第二部は、電話と空間・場所に関する論考をまとめた。第三章では、日向伸夫と牛島春子の作品を考察することで、「満洲国」における電話に関して考察した。電話は同じ言語を持つ者同士を結びつけるが、異なる言語を持つ者同士の場合は両者の距離を拡大させることに繋がっていることを指摘した。

第四章では、安岡章太郎「ガラスの靴」を分析することで、占領期における電話の様相を考察した。先行研究では「僕」が悦子を諦める理由はクレイゴ中佐という外在的要因にあるとされてきた。しかし、電話によるメディア空間に着目することで、内在的な要因が潜んでいることを提示した。また占領軍に対し、日本が通信費を負担する仕組みが小説の背景にあることも指摘した。

第五章では、中上健次「十九歳の地図」を取り上げた。作品の背景として電話網の拡大があり、電話の接続先の大幅な増加があることを指摘した。一見電話は「脱場所的なメディア」に見える。しかし電話網が拡大しても、電話を掛けるという行為は場所に対する意識を必然的に喚起しているということを指摘した。

第三部では、身体性に着目した。第六章は、夏目漱石「彼岸過迄」を分析し、敬太郎の身体についての比喻表現を考察した。「結末」において敬太郎は「受話器」と評されている。これは指示を一方的に受ける存在としての敬太郎を表しているが、聴き手としての敬太郎が受動性と主体性の両面を持つことも考える必要があるとした。

第七章では、松本清張などによる複数の推理小説を横断的に考察することで、「電話の声」に付与される身体性の変容に関して考察した。電話事業史において声の明瞭度が優れた四号電話機の登場は画期的だったとされているが、その影響の具体的記述は乏しい。本章は推理小説に注目し、四号電話機普及以後では「電話の声」が犯人特定の手掛かりとなり得ていることを指摘し、同作における身体性の変容を論じた。

以上の考察を通して、電話というメディアが小説においてどのように描かれてきたのか、そして人々の電話についての経験がいかに変容してきたのかを明らかにした。

論文審査の結果の要旨

[本論文の評価]

近現代小説の中に描かれるメディアには、新聞、雑誌、手紙、電報などさまざまな種類がある。これまでの研究は登場人物たちのコミュニケーションの仲立ちとなり、物語に変化をもたらすそうした媒介物について研究を重ねてきており、とりわけ手紙については研究の蓄積が厚い。しかし電話に関しては、日本文学研究において研究が多いとはいえない。また、社会学などのコミュニケーション史研究においては優れた業績もあるが、電話の事業史や機能の分析に重点が置かれており、人々の経験の具体相を掘り起こそうとする取り組みは手薄である。本研究は、近代小説に描かれた電話とそれを用いる人々のようすを考察することで、以上のような研究の欠落を補おうとした挑戦的成果であると評価できる。

本論文の優れた点は、三つにまとめられる。一点目は、小説に描かれた電話の姿を明治から現代にいたる大きなパースペクティブのもとで整理した点である。論文の章立ては時系列にはなっておらず、その点についての読みにくさは審査委員から指摘があったものの、総体としては、家庭や事業現場への浸透、声の輪郭を明瞭に伝える技術的革新、そしてスマートフォンの登場という、普及以前から現代にいたる電話の文化史の試みとなっている。小説の分析を通したコミュニケーションの変容の記述として、興味深い成果となり得ているといえよう。

二点目は、コミュニケーション史研究が取り上げてこなかった人々の生活の具体的ありさまに迫ろうとした点である。電話を用いて交わされた過去の会話はほぼ残されていないが、本論文は小説に着目することでその諸相を取り上げようとした。もちろん、執筆者は文学作品が虚構であり事実そのものと同一視することができないことを承知しており、その制約を自覚しつつ、声の不明瞭さに由来する混乱やいたずら電話、恋愛などといった具体的コミュニケーションのありさまを追究している。

三点目は、取り上げた個々の作品研究への貢献である。電話という切り口を用意することにより、たとえば夏目漱石の「彼岸過迄」、安岡章太郎の「ガラスの靴」、中上健次の「十九歳の地図」など、それぞれの作品論において、登場人物や事物の理解についてこれまでとは異なった視座や新たな分析の角度を提示することに成功している。

ただし、本論文にも問題点がないわけではない。全般に小説表現の分析の面では、さらなる緻密さが望まれた。また時代の文脈と照応させていく手際は着実であり信頼できるものだが、小説表現自体が時代を追って更新されていくさまも電話の技術的変遷と平行して考えられるはずであり、小説表現史への目配りが欠けていたことは惜しまれる。これらの課題は残るものの、今後の研究の可能性を示すものとも言え、本研究の達成が揺らぐものではない。

以上により、審査委員一同、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判断した。